

①自然環境の概要

百間川河口周辺の生物環境

百間川河口周辺の生物環境

河口周辺で確認された主な生きもの（H7～H14）

- ・植物 ミゾコウジュなど(約200種)
- ・哺乳類 カヤネズミなど(6種)
- ・爬虫類 シマヘビなど(3種)
- ・両生類 アマガエルなど(5種)
- ・昆虫類 トノサマバッタなど(約140種)
- ・底生動物 ヒメタニシなど(140種)

出典：河川水辺の国勢調査資料など

水際（右岸）

- ヌートリア
- ウシガエル
- ゲンゴロウブナ
- ヒラギ
- メダカ
- テナガエビ
- ハネナガイナゴ
- コガマ

右岸側～人の利用～

河川敷の多くを公園などで高度利用されており、生物の生息にはあまり適していません。

水面

ミサゴの飛翔が多く確認されています。
カワヒガイ、コウライモロコなどの魚も確認されています。

水面

ミサゴの飛翔が多く確認されています。

河口部

冬にはカモ類が多く見られます。魚を食べるミサゴも多く見られています。河口の川岸ではメダカやトビハゼ、マルタニシなども確認されています。

水面・水中

- カムリカイツブリ
- カワウ
- チュウサギ
- ミサゴ
- コアジサシ
- カワセミ
- ギンブナ、ワタカ

水際（左岸）

- カヤネズミ
- チョウゲンボウ
- メダカ、ヒラギ
- マハゼ、トビハゼ
- マルタニシ

中州

- カヤネズミ
- ヌートリア
- コウベモグラ
- カワセミ
- オオヨシキリ
- セッカ、オオジュリン
- チョウゲンボウ
- ハネナガイナゴ

水路

- トモエガモ
- ゲンゴロウブナ
- モツゴ、ニゴイ
- メダカ、メナダ
- カワヒガイ
- ミナミヌマエビ

左岸

- カヤネズミ
- ハツカネズミ、タヌキ
- オオヨシキリ、セッカ
- アマガエル
- ツチガエル
- カナヘビ、シマヘビ
- ミゾコウジュ
- ウキヤガラ

左岸側～生きものの生息場所～

河川敷～水際

水際にヨシ群落、河川敷にオギ群落やセイタカアワダチソウなどが広がっており、そこにアマガエル、ツチガエル、ヌマガエルやトノサマガエルなどの様々な生きものが棲んでいます。

中州

ヨシ群落、オギ群落やセイタカアワダチソウ群落などが広がり、カヤネズミ、モグラ、オオジュリンなどの小鳥類、トノサマガエルやシマヘビなど様々な生きものの生息場所となっています。

中州との間の細い水路

昔はここでオニバスがみられました。現在ではカモ類、メダカ、エビや貝類などの生息場所となっているほか、水際には貴重な植物も見られます。

凡例

- 哺乳類
- 鳥類
- 両生・爬虫類
- 魚類
- 昆虫類
- 底生動物
- 植物

植生凡例

- | | | | |
|----|----------------|-----|------------|
| 2 | ホテイアオイ群落 | 13 | メダカ、ネザサ群落等 |
| 5 | エノコログサ群落等 | 20 | センダン群落 |
| 6 | セイタカアワダチソウ群落等 | 24 | 人工草地 |
| 7 | ヨシ群落 | 251 | 公園・グラウンド |
| 9 | オギ群落 | 253 | 人工裸地 |
| 10 | メリケンカルカヤ群落等 | 26 | コンクリート構造物 |
| 12 | ジャヤナギーアカメヤナギ群集 | 28 | 開放水面 |

左岸河川敷・中州



河原と中州(植物)

左岸より上流側を見たところです。堤防側にオギとセイタカアワダチソウ、水辺にヨシが茂っています。中州にはほところどころにヤナギが生えています。



カヤネズミ(哺乳類)

河川敷のヨシ、オギなどの草地にすむ日本で一番小さなネズミです。草はらに写真のように草で編んだ巣を作り、バッタなどを食べて暮らします。中州で巣が確認されています。この写真の真中に巣があります。



カナヘビ(爬虫類)

主に草地や人家の周りでみられます。名前にヘビとつきますが、トカゲの仲間です。長い尻尾を持ち、褐色の体はうろこに覆われガサガサしています。



アマガエル(両生類)

平地の林から草地にすんでいるおなじみの小さなカエルです。体の色を淡黄色～緑～暗褐色と様々に変えることができます。



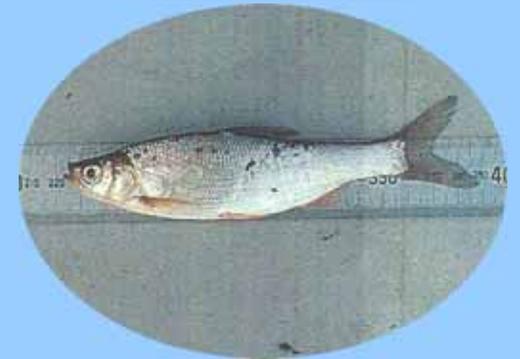
ハネナガイナゴ(昆虫類)

夏から秋にかけてみられる黄緑色のイナゴです。翅が曲げた後肢よりも長いので「羽長」イナゴ。湿った草地にすみ、イネ科の植物を食べます。



カモ類の集団越冬地

冬には河口部や中州の周辺にたくさんのカモ類が集まります。水際のヨシの近くで休息する姿など、比較的岸の近くにみられます。



ワタカ(魚類)

流れがとてもゆるやかなところにいる、全長30cm程度になるコイの仲間です。雑食ですが水草を主に食べます。

左岸河川敷



チュウヒ

広い河原等で見られる大型の猛禽類。冬鳥でネズミや小鳥などを食べる。



アオジ

晩秋から早春にかけてやってくるホオジロの仲間。草の実を食べる。やぶに多い。



ジョウビタキ

晩秋から早春に河原や田んぼにやってくる小鳥。ヒッヒッと鳴き、目立つ。



ノビタキ

春秋の渡りの時期に河原や田んぼでよく見る。昆虫を食べる。



オオヨシキリ

春～夏にやって来てヨシ等に巣をかける。昆虫を食べる。ギョギョシと大声で鳴く。

河口部浅場



タカブシギ

春秋の渡り時期に見られるシギ。浅場で貝や昆虫などを食べる。



タゲリ

主に春秋の渡り時期に見られるチドリの仲間。昆虫、ミミズ、貝などを食べる。



セイタカシギ

渡り時期にまれに見られる足の長いシギ。ヤゴ、小魚などを食べる。

河口部水面



オナガガモ

秋～春に見られる。は名前のとおり尾が長い。水面で逆立ちして採餌する。



ヒドリガモ

秋～春に見られる。は頭が茶褐色、額～頭が黄白色が目立つ。



オオバン

冬に見られるが多くはない。全身が黒く、白い額が目立つ水鳥。

写真は岡山市沖元の太湯さんよりご提供いただきました。

②歴史的功績（治水・新田開発）の概要

河口水門部の歴史的な役割

旭川の放水路である百間川の果たした役割は、次の4つであるが、津田永忠による新たな土木技術の開発（河口部の遊水池化と樋門との組み合わせによる効率的な排水処理）によって完結したものである。

岡山城下を洪水から守る放水路

上道郡内の小河川の排水を処理する排水路

川内四か村を洪水から守る放水路

新田開発における基幹的な排水施設



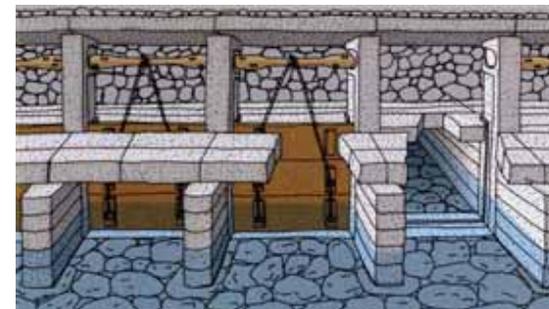
河口水門部での効率的な排水処理

百間川の河口部に長さ470間（846m）の潮止堤を築き、その内側にラッパ状の広大な遊水池を配した。これが大水尾である。潮止堤は1692年に、樋門は1704年に唐樋を最終として完成した。



備前国上道郡沖新田図

そして、潮止堤及び5箇所の樋門（西側より五蟠角樋・五蟠水門・中五蟠樋・唐樋・巽屋樋）により、海面より低い周辺地域からの排水を一時的に貯め、干潮時に樋門を開けて児島湾へ排水する一方、高潮時には樋門を閉めて海水の進入を防ぎ、洪水時には速やかに児島湾へ洪水を流出させた。



上部は潮止堤

下部は排水樋門

樋門の構造イメージ

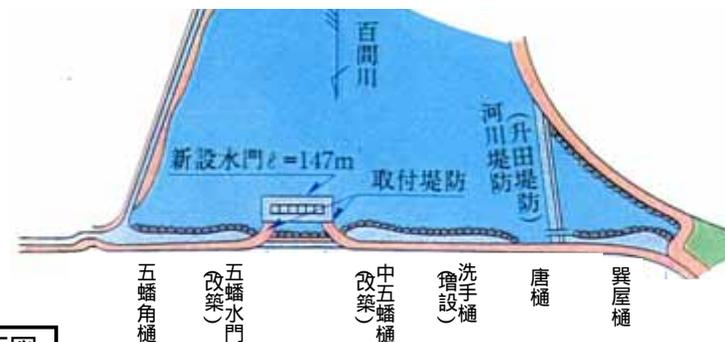
百間川河口水門部の全景（昭和28年9月撮影）

五蟠角樋・唐樋・巽屋樋については、築造当時のまま残っている。五蟠水門は大正3年に、中五蟠樋は大正13年に改築されている。また、洪水時の流下能力を高めるため、明治25年頃に洗手樋が設計され、6箇所のカギ門となった。

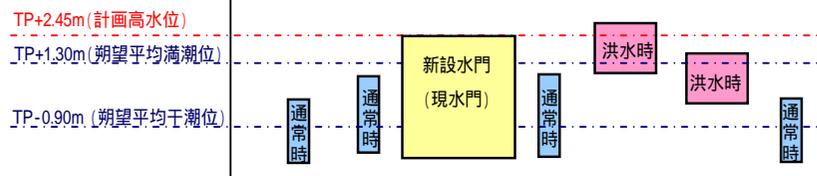
平常時は、五蟠角樋・五蟠水門・中五蟠樋・巽屋樋の4カギ門にて排水していた。そして、洪水時には、唐樋（小洪水時）と洗手樋（大洪水時に6連破壊扉式）を加え排水していた。

昭和36年の第二室戸台風による大災害を契機として、昭和38年度から百間川河口部の改修工事に着手し、昭和43年3月現水門が竣工した。

平面図



樋門の断面図



樋門：百間川側からの眺め



五蟠角樋



五蟠水門



中五蟠樋



洗手樋



唐樋



巽屋樋

全景：児島湾側からの眺め



樋門：児島湾側からの眺め



五蟠角樋



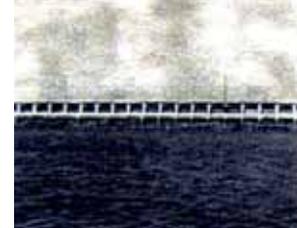
五蟠水門



中五蟠樋



洗手樋



唐樋



巽屋樋

河口水門の築造に携わった人々の功績をたたえる碑等

沖田神社と開墾遺跡碑

うじがみ
沖新田の入植者の氏神として元禄7年(1694年)、現在の社殿がある所から約1キロ南に造営され、宝永6年(1709年)現在の場所に移された。



沖田神社

ながただ
沖新田開拓の功労者である津田永忠の功績をたたえる開墾遺跡碑は、明治24年、開墾200年祭を記念して、建てられた。



開墾遺跡碑

沖新田開拓の最後の工事「潮止め」が難行したが、この時代、水辺の工事をする際に龍神に人間を水底に沈める「人柱」のならわしがあった。津田永忠のげじょ下女の於喜多(おきた)は、自ら「人柱」となり海を静め、工事が完成できたと伝えられている。大鳥居から入って左手に津田永忠像、正面の本殿の床下に、おきたのものとされる祠が、また本殿の裏側におきた姫神社がある。



津田永忠像

ふるみや 古宮神社

現在の位置に鎮座する前の沖田神社である。



水門碑と祠

水門東端に河口水門の完成を祝い明治25年に水門碑が建てられ、その隣に祠が並ぶ。



百間川築造300年記念碑

百間川築造以来300年にわたる水との闘いに一生を打ち込んだ幾多の先人の功績をたたえ、百間川及びその周辺の山々を模して配している記念碑。昭和61年の記念式典で除幕された。



沖新田干拓三百年記念碑

沖新田の干拓事業300年を記念して、六番川水の公園に建てられた記念碑。六番川水の公園は、遊水池として利用されてきた六番川を、岡東浄化センターと一体的に整備した総合公園である。



③地域風土と地域文化の概要

干拓から始まった地域風土・地域文化

河口水門周辺地域の風土や地域文化は、沖新田の干拓から始まる。新田に道路・用水路・橋・樋門・大堤を整備した後、隣村をはじめ和気・赤磐・邑久・備中・児島からも入植者が集まった。干拓地に暮らす人々に受け継がれてきた生活や知恵、祈りなどを今でも見ることができる。

沖新田の農業・生活習慣

堤防近くの湿地帯では、低い土地、塩害対策、荷物の運搬のため、堀上げ田と水路を交互に配した「堀田」で耕作が行われていた。



堀田

干拓地では井戸堀をしても塩分を含み、飲料水に大変苦労し、「水漉甕」を使って生活していた。



濾過槽

大正時代中頃から各集落ごとに共同の大型濾過槽を設け、用水から飲料水を確保するようになった。用水は、農業面だけでなく、日常生活面においても非常に重要であった。



濾過槽の構造イメージ

また、お地神が各旧町内に1・2か所あり、春の社日には米・麦・粟・黍・豆などの豊作を祈り、秋の社日には初穂を供え感謝している。



お地神さま



小学生による用水掃除(S12)



漁業の変遷

戦前までは、堤防の外でライトを照らして魚を獲るベカたき漁が行われていた。



ベカたき漁(戦前)



四つ手網漁

四つ手網漁は、六番川で行われていたが、埋め立てにより、現在の位置へ移った。

高島

戦時中頃まで桜の名所であった。日本書紀にも登場した場所であり、戦前は聖跡として、島にある岩を御神体として宮浦地区から崇められていた。



高島(絵図より)



高島の桜(S16頃)



高島の聖跡(S16)

牛窓往来

昔の岡山～牛窓の主要道。牛窓港は古くから栄えた港で、岡山城下から牛窓港間の通行にこの道を使用、近世には朝鮮通信使の接待も往来した。古くは芥子山麓を通過していたが、沖新田完成後は、新しくこの地を通る道が整備された。現在も往来に沿って、道標などの往時を偲ぶものが残っている。

沼名前神社

福山市鞆の浦の沼名前神社より、この地方の流行病の蔓延を治めるため分神したものである。7月第2日曜日(以前は7月14日)の夏祭りには、重さ約400kgの神輿が出る。



芥南桜並木と潮止堤

平成2年に植えられた桜60本余りがあり、春の花見と秋の紅葉が美しい場所。桜の植えられた土手は松崎新田の潮止堤防といわれている。



仕切り道

沖新田の潮止めののち、耕地の区画整備の基本線として仕切られた道。大仕切道、小仕切道、宮道、仕切土手など、いくつかの名前が残る。

宮道

1818年の沖新田東西之図に「宮道通」と書かれている。東には現在のの上南中学校の西、嘉平樋あたりから、西は旭川堤防までをいう。1709年沖田神社が現在の位置に移ってからは神社参詣の道ということで宮道と言われたものと思われる。



大仕切道・小仕切道

おおしきりみち さんげんがわ たつみ

大仕切道: 三間川辰巳墓地の所から西へ百間川堤迄約2.6km。古くは仕切道といえはこの道のこと。

こじきりみち

小仕切道: 上南公民館北約250m位の所のT字路から百間川堤防まで約2.4km。今は小仕切という地名として残っている。



旧三幡港と三幡轻便鉄道

旧三幡村は、岡山港の外港として発展し、四国への連絡船もこの港から出ていた。また、大正初期から明治初期にかけて、新田穀倉地帯と岡山市をつなぐ三幡轻便鉄道が運行されていた。

④水辺空間の現状

砂川合流部付近の現状



河川敷の状況



河川敷の状況



河川敷の状況



河川敷の状況



河川敷の状況



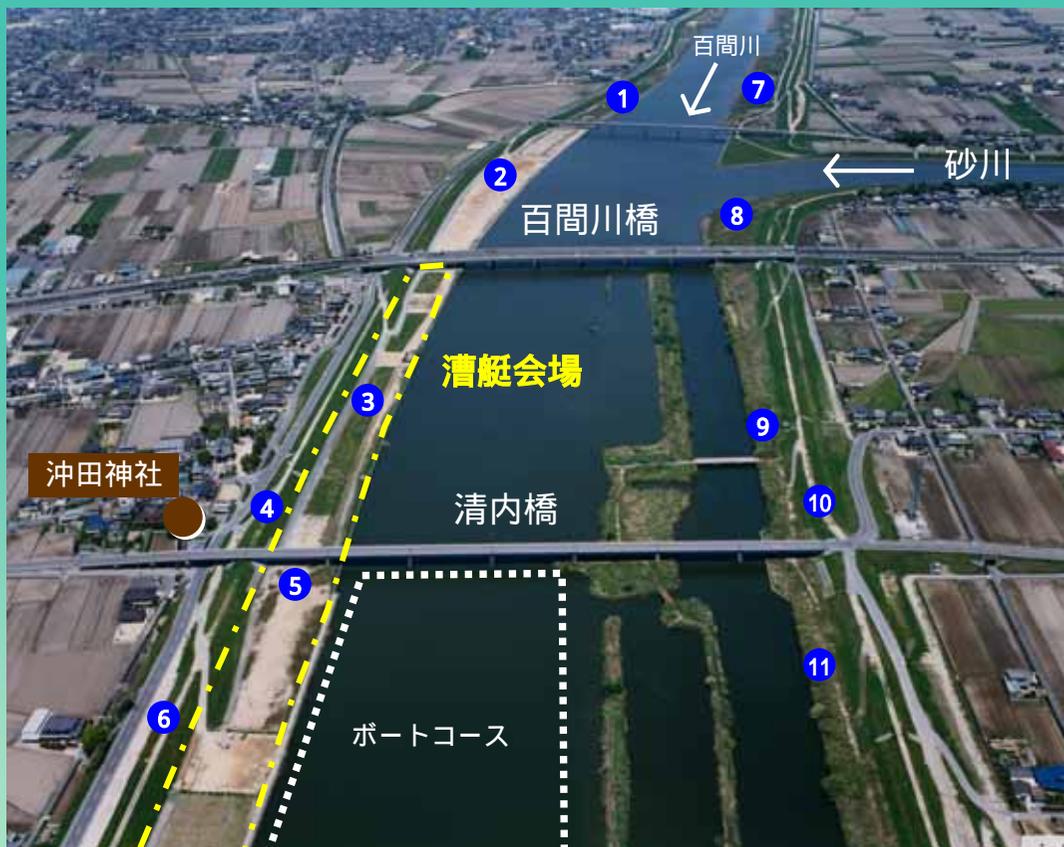
堤防の状況



河川敷の状況



堤防の状況



河川敷の状況



堤防の状況



河川敷の状況

漕艇会場付近の現状



ボート艇庫



水辺の利用状況



緩傾斜堤防の状況



水際部の状況



河川敷の状況



進入路の状況



堤防の状況



河川敷の状況



堤防の状況



河川敷の状況



市道政津沖元線の状況

百間川河口水門付近の現状



河川敷の状況



堤防の状況



市道沖元1号線の状況



堤防の状況



堤防の状況



堤防の状況



河川敷の状況



市道小橋町沖元線の状況



市道小橋町沖元線の状況



海岸の状況



水際部の状況

